

編纂所だより

大阪市史編纂所（発行）

〒550-0014 大阪市西区北堀江 4-3-2

第46号

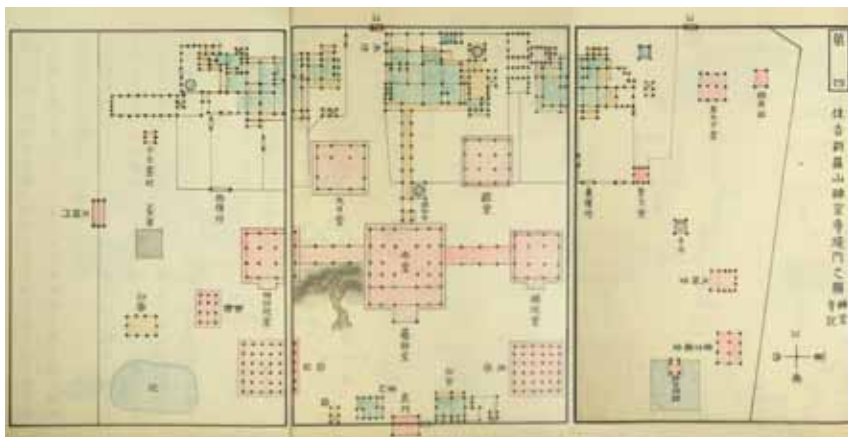
大阪市史料調査会（編集）

大阪市立中央図書館内 TEL06-6539-3333

●『新修大阪市史 史料編』第4巻中世Ⅲ

このたび大阪市史編纂所では、『新修大阪市史 史料編』第4巻「中世Ⅲ」を刊行しました。本書は、めいとく明徳4年（1393）からてんしやう天正10年6月まで（室町・戦国時代）の大阪市域に関する史料を掲載しています。室町・戦国時代の大阪は、かきつ嘉吉の乱、おうにん応仁・ぶんめい文明の乱、めいおう明応の政変といった中世の画期となる大きな事件と関わりを持っていました。また、この時期には四天王寺・住吉社といった寺社の史料も豊富に残されています。本巻は、こうした室町・戦国時代の大阪の新しい側面を知る格好の史料集です。購入をご希望の方は、発売元である大阪市史料調査会（電話06-6539-3333）までお問い合わせください。

（本体価格 5,500円）



住吉新羅山神宮寺境内之図 摂津鈔附図第四之上 大阪市立中央図書館蔵
（『新修大阪市史 史料編』第4巻「中世Ⅲ」口絵掲載写真）

●戦国時代のはじまりと大阪

戦国時代のはじまりはいつかといえば、第7代室町幕府將軍足利義政よしまさの後継者争いに端を発した、おうにん応仁元年（1467）からの応仁・文明の乱を思い浮かべる人が多いでしょう。諸国の守護（大名）は細川勝元かつもとの率いる東軍と、山名宗全そうぜんの率いる西軍にわかれて、京都を中心に11年にも及ぶ戦争を続けました。この戦乱は、京都を焼け野原にただけでなく諸国にも飛び火しました。そして、室町幕府の権威は大きく失墜し、各地では群雄が割拠して戦国時代へ突入した、というのが通説的な理解です。

しかし、近年では室町幕府の権威は応仁・文明の乱で完全に消滅したわけではなく、ある事件まで維持されていたことがわかっており、その事件をきっかけに戦国時代がはじまるという見方が強くなっています。その事件とは、めいおう明応2年（1493）に起こった明応の政変です。

明応2年2月に第10代將軍足利義材よしき（のち義植よしたね）は、幕府に反抗した河内国の畠山基家もといえを討伐するため、諸国の守護を軍事動員し、大軍を率いて京都を出陣しました。義材は、基家と対立する畠山政長まさながの所領河内国 橋島たちばなじまの正覚寺しょうかくじ（平野区）に布陣して、高屋城たかや（羽曳野市）に籠もる基家と戦いました。

そんな中、4月に義材が留守中の京都で大事件が発生しました。室町幕府の管領かんれいを務めていた細

川政元（勝元の子）が、義材の將軍職を廃して、新しい將軍（第11代將軍足利義澄）を立てるというクーデターを起こしたのです。それにより、従軍していた守護や將軍の直臣団は義材を見捨てて京都へと逃げ帰りました。正覺寺の陣にいた畠山政長と義材は、政元の家臣上原元秀の率いる軍勢に包囲され、政長は自害、義材は元秀のもとに投降して捕らえられました。

これにより、幕府の実権は新將軍足利義澄を擁立した細川政元が掌握しました。のちに義材は京都の幽閉先から脱出して、一時將軍に返り咲きますが、この事件以降、室町將軍の權威が著しく低下し、細川氏の嫡流である細川京兆家が幕政の一端を握り続ける政治体制が続きます。

このように、室町將軍の家臣である細川政元が將軍を差しおいて幕府の実権を握ったという事実、またこの時期から本格的に諸国での群雄割拠がみられることから、明応の政変こそが戦国時代のはじまりを示す象徴的な事件と考えられるようになったのです。つまり、將軍義材が細川政元に敗れることになった正覺寺の合戦は、戦国時代のはじまりを告げる合戦だったのであり、戦国時代は大阪からはじまったといえるのです。

その後、戦国時代の大阪では、阿波（徳島県）の細川氏の家臣から下剋上を成し遂げた三好長慶や、織田信長とおよそ10年に及ぶ合戦を繰り広げる大坂本願寺が勢力を拡大します。そして、本能寺の変での信長の死により、彼の後継者となった豊臣秀吉が大坂城を築城します。その大坂城は、戦国最後の合戦といわれる大坂夏の陣で灰燼に帰し、ここに、戦国時代は事実上幕を閉じます。戦国という時代は、大阪からはじまり、大阪で終わったといっても過言ではないでしょう。

『新修大阪市史 史料編』第4巻中世Ⅲは、この明応の政変のように、これまであまりなじみのなかった室町・戦国時代の事件・人物と大阪との関わりを示す史料を多く掲載しています。本書をひもとき、新しい室町・戦国時代の大阪をイメージしてみてください。（生駒孝臣）

●初代中村鴈治郎と新聞作家渡辺霞亭

五代目中村翫雀が四代目中村鴈治郎を襲名し、その披露が平成27年1月に松竹座で行われました。京都南座では、同年11月に襲名披露が行われ、「碁盤太平記」や「土屋主税」などが上演されました。「碁盤太平記」と「土屋主税」は、どちらも忠臣蔵をもとにした演目です。これらの演目は、明治・大正期に活躍した作家でジャーナリストの渡辺霞亭が、初代鴈治郎の芸に合うように脚色したもので、初代鴈治郎の当たり狂言となりました。

初代中村鴈治郎は、明治20年代から昭和前期にかけて活躍した大阪きっての人気役者でした。彼の人気を支え、その魅力と持ち味を引き出したのが渡辺霞亭です。霞亭は、明治10年代後半から大正末期にかけて、1000編以上の小説を執筆した作家であり、『大阪朝日新聞』の記者でした。明治30年代になると、霞亭は『大阪朝日新聞』の看板作家になりました。彼が執筆した新聞小説は、すぐに芝居になって大阪一の劇場街道頓堀で上演され、観客を呼びました。



中村鴈治郎の役者絵（『上方』第74号）

「土屋主税」は、渡辺霞亭が『大阪朝日』に連載した新聞小説「大石内蔵助」の一節を、初代鴈

治郎の芸に合わせて書き直したものです。初演は、明治40年（1907）10月に道頓堀角座で行われました。土屋主税は、吉良上野介の隣家に住む旗本で、赤穂四十七士の打ち入りを支援した人物です。観客を最も惹きつけたのは、四十七士のひとりであった大高源吾が、打ち入り後に土屋主税を訪ねる場面でした。鴈治郎扮する土屋主税が、大高源吾に「よくも本望を遂げられた。去年以来のご辛苦お察し申す」と言いながら涙を流すと、鴈治郎の芸に魅せられた観客も一斉に涙を流しました。渡辺霞亭の脚色によって鴈治郎の芸の魅力が引き出され、明治後期の大阪の観客の心をとらえたのです。衣装や小道具、大道具などにも趣向が凝らされ、元禄期の風俗画を参考にしつつ、華やかで上品なものが揃えられました。

鴈治郎の芸と舞台の美しさが呼び物となって、角座は連日大入り満員が続き、日延べを繰り返しました。当時の芝居は通常、月末までに閉場して休業し、翌月には別の演目を上演していました。ところが、「土屋主税」の初演では、あまりの人気に月末の休みも挟まずそのまま翌月まで芝居を打ち続けました。上演期間中は、角座に観客が押し寄せ、開場後すぐに客止めとなることもたびたびあったようです。

明治後期から大正期にかけて、霞亭が初代鴈治郎のために執筆した脚本が観客にうけ、これらの演目は二人の代表作となりました。大正期に入って初代鴈治郎が当たり狂言を集めて選定した「玩辞楼十二曲」のなかに、渡辺霞亭が執筆した「土屋主税」や「碁盤太平記」も選ばれています。これらの演目は、大正15年（1926）に霞亭が、昭和10年（1935）に鴈治郎が没した後も上演され、現在にも受け継がれています。（相良真理子）

◆『新修大阪市史 史料編』第4巻「中世Ⅲ」関連刊行物（既刊）のご案内

『大阪市史史料』第70輯「中島崇禅寺領目録」

嘉吉元年（1441）6月、第6代室町幕府將軍足利義教は、赤松満祐によって暗殺されます。その後、赤松は討伐され、彼の所領であった西成郡中島（現在の東淀川・淀川・西淀川・北・福島・都島各区の一帯に相当）は幕府の御料所（直轄地）となり、管領細川持之の弟、持賢が預かりました。持賢は義教の菩提を弔うため、崇禅寺を建立し、赤松から没収した中島の一部を寺領として寄進しました。その後、細川氏をはじめその家臣や地元の有力者からも田畠の寄進をうけ、中島を中心に形成されたのが崇禅寺領です。

本史料輯は、寛正2年（1461）に作成された中島崇禅寺の寺領目録と、それに関連した文書61点を翻刻掲載したものです。この寺領目録は、中世の開発のようすがわかる、大阪市域では貴重な史料です。『新修大阪市史 史料編』第4巻「中世Ⅲ」とあわせてご参照ください。

本体1,800円 送料（実費）

◆催し物のご案内

『新修大阪市史 史料編』第4巻「中世Ⅲ」の刊行を記念して、関連企画展示「室町・戦国時代の大阪一史跡と伝承」を大阪市立中央図書館3Fエレベーター前で3月31日（木）まで開催しています。『新修大阪市史 史料編』第4巻「中世Ⅲ」で取りあげた嘉吉の乱、本号で紹介しました明応の政変に関する史跡の写真パネルや、四天王寺・織田信長に関する史料を展示しています。是非お立ち寄りください。

刊行物のお求め方法

大阪市史編纂所の刊行物は大阪市史料調査会で窓口・通信販売を行っています。詳しくは大阪市史料調査会（大阪市立中央図書館3階大阪市史編纂所内・電話 06-6539-3333）までお問い合わせください。

絵はがきでみる昔の大阪（24）

大阪市立露天幼稚園（大正時代末期）

今回とりあげた絵はがきは、5枚組のもので袋に入っています。編纂所蔵のものには2種類あり、一つの袋には5枚入っていますが、もう一つの方は3枚しかありません。写真はそれぞれ違います。露天幼稚園とは、どのようなものでしょうか。くわしく記されたものはあまりないのですが、少ない文献から明らかになったのは、次のようなことです。

大正10年（1921）夏のこと、大阪市視学鈴木治太郎氏が大阪市南区のある長屋を巡視し、この地域の教育の必要性を痛切に感じて露天保育を試みることになりました。視学とは、府や市・郡に置かれた教育の行政に当たる人のことで、学事の視察や教育指導を行う任務を持っていました。この鈴木氏の指導で、大正10年11月5日に大阪市は露天保育を実施しました。

露天保育とは、建物のないところで幼児などを保育することです。これは大阪市が費用を出して、保母の俸給も大阪市が出していました。



（一 其） 況 状 育 保 園 稚 幼 天 露 立 市 阪 大

まず、決められたところに幼児たちが集まり、点呼をとったあと、保母たちに引率されて、あいぜんどう愛染堂や四天王寺境内、天王寺公園などにでかけます。乳母車に保育道具を積んで運んでいたようです。現在と違って、このような場所は幼児たちが、思い切り動きまわれる環境だったと思われます。大阪市は、建物はなくても教育はできること、教育は自然に帰らなければならないこと、人さえあれば教育はどこでも出来ることを理由として露天保育を始めたということです。この露天保育は少なくとも、大正14年ごろまでは続いていたようですが、その後のことは不明です。

なお、このころ同じような考えから「家なき幼稚園」が各地でもうけられていたようです。大阪市の露天保育はそのさきがけだったのです。（堀田暁生）

【26号の訂正】平成18年6月に発行しました編纂所だより第26号の絵はがきでみる昔の大阪（5）で大阪ホテルを紹介しましたが、「大正11年（1922）の火事で全焼」は「大正13年（1924）の火事で全焼」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

「編纂所だより」は3月と9月の年2回発行し、大阪市立各図書館のほか、各区役所、各区民センター、市役所市民プラザ、総合生涯学習センター及び各市民学習センター、大阪歴史博物館、大阪城天守閣、住まいのミュージアムなどに置いています（数に限りがあります）。大阪市立中央図書館（3階大阪コーナー）及び各区の図書館では最新号を常備していますので、カウンターでおたずねください。（平成28年3月発行）